方向

第一六六号　一九九五年一月五日　京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内　方向社

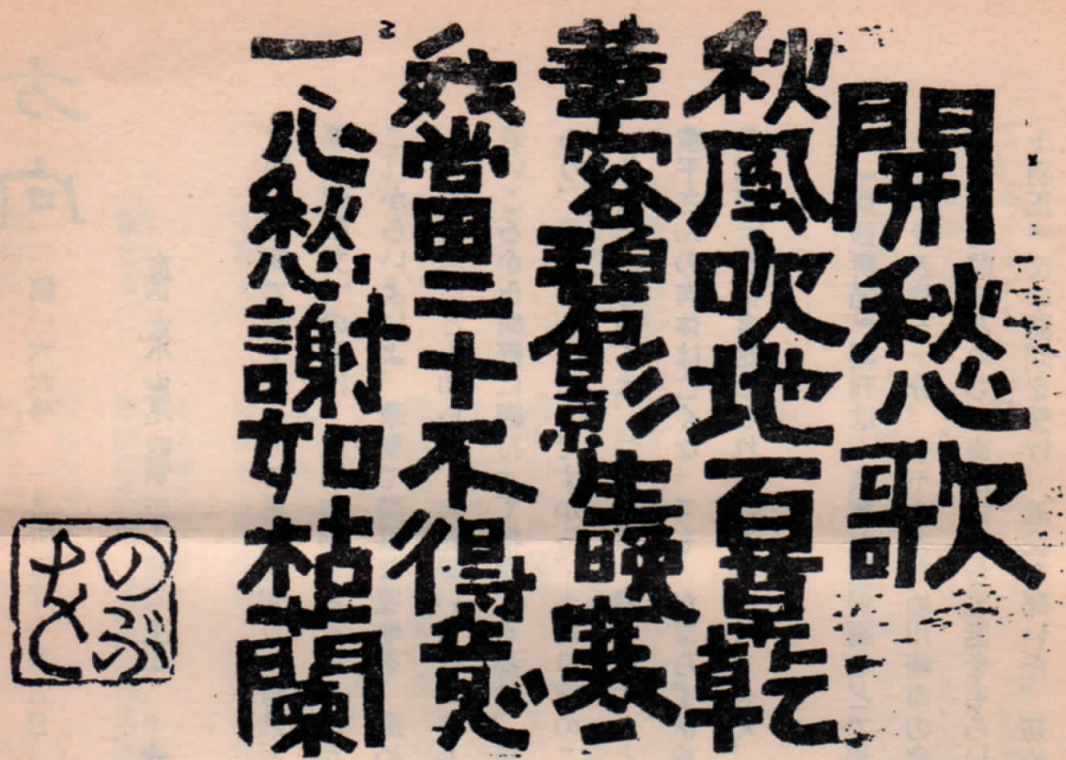
夜來庵曠平居士

－森田貞子夫人への手紙－　1994 12 30　原田憲雄

今朝、新聞で曠平さんのご逝去を知り、愕然としました。『毎日新聞』に連載の平安建都千二百年「夢源氏剣祭文」の絵は、数回お弟子さんのものが混じりはしても、自分の手で完結されたので、お元気で、これからいよいよ、華麗で幽遠な境地を、深めて行かれるものと楽しみにし、大いに期待していました。入院されたことも知らず、お見舞いもせぬうちに、お悔みを申し上げねばならないのは悲しいことです。若いころから病躯に鞭打って精進する姿は、痛々しいものでしたが、芸術家にとっては、それが喜びであり、使命でもあるのですから、当たり前のことだったのでしょうが、常に傍にいて見守らねばならないあなたにとっては、つらく長い歳月だったと、お察しいたします。

曠平さんの肉体は亡くなっても、かならず釈尊のみもとに迎えられて、こんどは穢土即寂光の「霊山大曼陀羅」を描き始められるに違いありません。南無妙法蓮華経。

※『京都新聞』朝刊は「典雅な歴史画などで知られる日本画家の森田曠平（もりたこうへい）氏が二十九日午後五時五十分、心不全のため川崎市の病院で死去した。七十八歳。……」と記す。この手紙を出して一時間ほどのち、森田家から電話をもらい、それからまた数時間後に、君の小学校時代からの親友上羽正一氏の訪問を受け、近況を聞いた。初めに掲げたのは君の法名である。合掌。



山本のぶを刻（一九九五　一）

李賀　開愁歌（上）

秋風は大地吹き　百草乾き
華山に碧の影ふかく　晩寒生じ
二十歳のおれは　意のままならず
心閉ざして　さながら枯れた蘭

八一〇年、文字通り二〇歳の作であろう。全部で一二句だが、来年「中、後段　八行を彫る予定」と山本氏。

さて、本誌『方向』は半年休刊したが、この号から『李賀歌詩編』の訳注稿を連載して復刊する。事情は、その「はじめに」に記す。読者諸賢のお気づきのことは、大小に関わらず、お教えいただきたい。

従来連載の「法華経巡礼」と「中国の詩人と仏教」は、訳注稿が終わるまで、休みます。これまた勝手ながらお許しください。

（一九九五年一月　原田憲雄）

李賀歌詩編（訳注稿　一）

1994 12 25　原田憲雄

はじめに

本書は、鬼才といわれた中国唐代の詩人李賀（七九一―八一七）、字は長吉、の作品の、できるだけ信頼しうる本文と、その訳注を、提供することを目的とする。かれの時代背景や伝記については『方向』『李賀研究』『李賀論考』などわたしの他の雑誌や著書で述べているので、ここでは、巻頭に唐の杜牧の「李賀歌詩集序」と同じく唐の李商隠の「李長吉小伝」を掲げ、巻末の解説と、年表とで、それらを補いつつ簡単に示すことにしたい。

二〇世紀の初めには、李賀は中国でも著名な存在ではなく、文学史でさえその名を記さぬものもあった。今日では、英語による全訳、ドイツ語などによる部分訳が出て、世界的に注目を浴び、中国でも研究者が輩出するにいたった。そのような環境の醸成に、日本の文学者や研究者の努力が少なからず寄与したことは、中国の詩人であり学者である杜国清教授らの述べているとおりであろう。

荒井健氏の『李賀』、鈴木虎雄博士の『李長吉詩集』、齋藤晌博士の『李賀』、草森紳一氏の『李長吉伝』（未完）などは、李賀の普及に大いに尽くした作業で、いまも研究の基本としての価値を失わない。けれども、荒井氏のものは選集であり、鈴木、齋藤両博士のものは全集ではあるが底本に問題が残る。多くの研究は、基礎的段階から応用の過程へ進みつつあると察せられるのに、その作業で使用され

ているテキストは精善とは言い得ない。この事情に促され、荒井健・中島長文両氏のお勧めもあり、本書を編集することにした。とはいえ、わたしは不学で、知見も広大ではない。思わぬ誤りを犯していないかを恐れる。大方の温かい示教によって正してゆきたい。

凡　例　（抄）

一　本書で校訂に使用する李賀集の諸本とその簡称を次のようにきめておく。〔　〕内は簡称。

〔宣城本〕　李賀歌詩編四巻　外集一巻　本集四巻は一二世紀、北宋末年の原刻で、外集一巻は南宋初年に増刊されたものであろう、といわれ、台北の国立中央図書館に蔵され、その影印本が同館から出版されている。本書では、これを底本とする。

〔宋本〕　歌詩編四巻　密韻楼景刊宋本七種。景刊の「景」は、影と音義おなじで、複写という意味である。この本は、宣城本の本集四巻を影印したものとされるが、一部に異文がある。

〔宋蜀本〕　李長吉文集四巻　景蕭山朱氏蔵宋蜀本、続古逸叢書。台湾学生書局から出ている本が入手しやすい。

〔蒙古本〕　歌詩編四巻　景常熟瞿氏鉄琴銅剣楼蔵本、四部叢刊。これはかつて「金刊本」と呼ばれた。

〔錦囊集〕　錦囊集四巻　外集一巻　秀水金氏梅花草堂影印善本之二。原本は元代の復古堂本だ

と伝え、「元刊本」と呼ばれるが、それには異説もある。

〔朝鮮本〕　李長吉集不分巻　江戸昌平坂学問所蔵、朝鮮活字本。いまは内閣文庫蔵。この本は、荒井健氏によって紹介された珍しい本である。

〔毛氏本〕　歌詩編四巻　集外詩一巻　明毛晋校、景汲古閣正本唐四名家集。

〔楽府詩集〕　楽府詩集一百巻　宋郭茂倩輯、景宋刊本。中津濱渉著楽府詩集の研究所収。

〔文苑英華〕　文苑英華一千巻　宋李昉等輯、一九六六年中華書局影印本。

〔唐文粋〕　重校正唐文粋一百巻　宋姚鉉輯、景明嘉靖本。四部叢刊。

〔唐詩紀事〕　唐詩紀事八十一巻　宋計有功撰、景明嘉靖本。四部叢刊。

〔才調集〕　才調集十巻　前蜀韋縠輯、景宋写本。四部叢刊。

〔全唐詩〕　全唐詩九百巻　清康熙御定。揚州詩局本。

〔明本〕　李長吉歌詩集四巻外巻一巻　宋劉辰翁評、呉正子注。

〔官板〕　唐李長吉歌詩四巻外集一巻　宋劉辰翁評、呉正子注。文政紀元昌平坂学問所。これは明本の日本での復刻本で、内容はほとんど同じだが、すこし異文がある。

〔曾益〕　昌谷集四巻　明曾益注。民国五十三年台北世界書局刊、李賀詩注。

〔董氏本〕　唐李長吉詩集五巻　明徐渭、董懋策注。董氏叢書。

〔宝翰楼本〕　李長吉昌谷集句解定本四巻　明姚佺、丘象升、蔣文運、丘象随注。宝翰楼刊本。

〔黄評本〕　李長吉集四巻外集一巻　明黄淳耀評、清黎簡批点。宣統元年掃葉山房石印。

〔姚文燮〕　昌谷集註四巻集外詩一巻　清姚文燮注。一九五九年北京中華書局刊、三家評注李長

吉歌詩。

〔方世挙〕　方扶南批本李長吉詩集四巻　清方世挙批。一九五九年北京中華書局刊、三家評注李長吉歌詩。

〔王琦〕　李長吉歌詩四巻外集一巻首一巻　清王琦注。乾隆二十五年序王氏宝笏楼刊本。

〔陳本礼〕　協律鉤元五巻　清陳本礼注。陳氏叢書。

〔王維哲〕　唐李長吉詩集五巻　清王維哲注。これも荒井氏によって紹介された珍しい本。

〔呉汝綸〕　李長吉詩集四巻外集一巻　清呉汝綸評注。壬戌（一九二二）芸文書局刊本。

〔荒井〕　李賀　荒井健訳注。一九五九年中国詩人選集一四。宣城本を底本とし朝鮮本などで校訂した最初の本で、訳注も優れる。全訳でないのが惜しまれる。

〔鈴木〕　李長吉歌詩集上下　鈴木虎雄訳注。一九六一年岩波文庫。

〔斎藤〕　李賀　斎藤晌訳注。一九六七年漢詩大系一三。

二　本書の記述はだいたい次の要領による。

1　まず、（　）内に四桁の作品番号を記す。作品番号は、四桁のうち第一桁の数字は巻数を示す。

例　（〇〇〇〇）　首巻ともいうべきもので、李賀に関する李賀以外の人の序文、伝記、批評など。

（一〇〇〇）　第一巻

（二〇〇〇）　第二巻

（五〇〇〇）　外巻

作品番号の四桁のうち第二桁以下は作品の全巻を通じての一連番号である。

例　（〇〇〇一）　李賀歌詩集序　杜牧

（一〇〇一）　第一巻　第一首（一連番号　一）　李憑箜篌引

（二〇五九）　第二巻　第一首（一連番号　五九）　金銅仙人辞漢歌

（五二二二－五二二七）　第五巻　第三首から第八首まで（一連番号　二二二二－二二七）

感諷六首

2　次に、題名の訳文と、原題名を掲げる。題名の底本の文字を改めた時は、その文字の右に▽印を加えた。ただ、異体字を改めるだけの場合は▽印は加えない。（例は省略）

3　次に、〔　〕内に、校訂した題名を訓読して掲げる。訓読文は常用漢字、新仮名遣いを原則とし、底本の文字を変えたものは（　）内に底本の文字を示す。ただ異体字を改めただけの場合は示さない。（例は省略）

4　題名の訓読に続けて・で区切って、題名などについて解説する。

5　次に、ふたたび（　）内に作品番号を記し、その次の行に、詩の訳文の第一句と、その原文とを掲げる。以下、第二句から結句にいたる。定本の文字を変えた場合の処置は、題名の時と同じ。

6　各句の原文の頭に、小文字で、句数を示す数字を置く。〇〇は序、〇一は第一句である。

7　次に、句数番号の下〔　〕内に校訂した第一句の訓読文を掲げ、・で区切ってその句についての注釈を記す。以下第二句から結句にいたる。結句の後に行を換え、・で区切って、批評や余論を述べることがある。

8　一首中で脚韻を換えている作品の原文には、換韻を示すため　』　印をつけた。これは鈴木虎雄博士に学んだ。（例は省略）

三　底本の文字はおおむね旧体字で、時に俗字や古字などの異体字を使っている。本書では、テキストとして掲示するときは、沉、鷺、臆など特殊な幾つかを除き、すべて通行の正字に改めた。

四　詩の訳文には、振り仮名を少なくし、必要なものは、解説、訓読文、注などで示すよう努めた。拙著『幽歓集』などでは文語の翻訳が多かったが、このたびはほとんどすべて口語に訳し改めた。

五　注は、李賀の詩の制作の機微を示す方面に力を注ぐ。「出典」「出拠」などといわれる古人の語句を努めて掲げたのも、その一つで、中国の古典詩を読むためには欠きえない方法と信ずる。語釈は、対応する訳文で分かるものや、漢和辞典を見れば簡単に知りうるようなものは出来るだけ省く。引用の詩文は、典拠を示す最小限にとどめ、常ならば二句あげるべきものを、一句だけ訓読で示し、題名は原文のままで済ますことが多い。

六　その他、紙幅の簡素をねがって雅正を失した記述が少なくないと思うが、読者において補っていただければ幸いである。

※目次と、杜牧の「序」と、李商隠の「李賀小伝」は、省略。

（一〇〇〇）

歌詩編第一巻

隴西の李賀

隴西李賀

〔歌詩編第一〕　・目次の題は「李賀歌詩編第一」だが、宋蜀本の目次の題は「李長吉文集巻目」で、第一巻の題は「李長吉文集巻第一」というように本によって記述法が異なる。それらの相違を分析して本の新古、刊行地などを判別しうる場合があるが、ここでは立ち入らない。ただ「歌詩編」は、歌詩を編集したもの、の意だが、「李長吉文集」といえば、李賀の散文と韻文をふくめた作品集、の意である。

〔隴西の李賀〕　・隴西　甘粛の南東の地。唐の皇帝の出身地とされたので、皇族の子孫の李賀も「隴西の」と称した。今日の研究によれば、唐の皇帝の実際の出身地は隴西ではない。しかし、唐代の人には、自分の苗字と同じ有名な大族の出身地を自分の出身地と称する風習があった。今の感覚からすれば経歴詐称にあたるが、当時はたれもが行なって恥じなかった。このような事実とは合わない自称の出身地を「地望」とか「郡望」といった。

（一〇〇一）

李憑の箜篌のうた

李憑箜篌引

〔李憑が箜篌の引〕　・李憑　唐の宮廷の楽士。賀と同時代で年長の楊巨源に「李憑が箜篌を弾ずるを聴く詩」があり、顧況（七二七？―八一五？）の「李供奉が箜篌を弾ずるを聴く歌」も同じ李憑をうたったものとされる。異説もあるが、いずれにしても、箜篌弾奏の名手だった。　・箜篌　漢音は「こう

こう」だが、日本では呉音で「くご」と読み習わし、竪箜篌、臥箜篌、鳳首箜篌の三種がある。ここのは竪箜篌で、ハープすなわち竪琴。岸辺成雄「箜篌の淵源」（『唐代の楽器』所収）は、箜篌の名称は、ペルシャ語で竪琴をあらわす「チャンク」の音を移したもので、前漢時代に中央アジアを経て、竪琴とともに中国に伝わったものであろう、という。唐代の竪箜篌は、その実物が正倉院に保存されている。なお、仏教では初期には音楽は禁止されたが、西暦紀元前後に大乗仏教が興起するとともに、仏塔、仏像などに音楽を供養し仏徳を讃歎することが勧められ、その楽器も「鼓を撃ち角貝を吹き、簫笛琴箜篌、琵琶鐃銅鈸」（妙法蓮華経方便品第二）などを主なものとし、箜篌がその中の一つに挙げられている。

・引　楽曲。楽府詩集に「古琴曲に五曲九引あり」といい、その九引として列女引、伯妃引、貞女引、思帰引、霹靂引、走馬引、箜篌引、琴引、楚引を挙げる。箜篌引は、崔豹の古今註によれば、朝鮮の渡し守りで霍里子高という者がいて、その妻の麗玉が作ったのだという。子高が朝早く舟を漕いでいると白髪の男が髪をふり乱し、壺をさげて、流れを横切り渡ろうとした。追いかけてきたその妻が、呼び止めたが及ばず、男は河に墜ちて死んだ。妻は箜篌をひいて「あんた、河を渡っちゃだめ。あんた、とうとう河を渡ったのね。あんたは墜ちて死んでしまった、どうすりゃいいの」とうたい、歌い終わると自分も河に身を投げて死んだ。子高が帰って妻に話す。妻はあわれに思い、箜篌をひいてその歌声を移した。聞いて涙を流さぬものはなかった。この歌が箜篌引として歌い継がれた（巻中）という。「李憑箜篌引」は、内容からいえば李憑の演奏の巧みさを描くほうに傾き、説話とのかかわりは薄そうだが、賀には別にこの説話をそのまま拡充した「箜篌引」（四一七六）があるので、あるいはここでも李憑の演目が箜篌引だったのかもしれぬ。それなら題は「李憑の弾奏した『箜篌のうた』」である。

・この詩については拙稿「石破天驚逗秋雨」（李賀論考）、「鬼時」（李賀研究　終刊号）参照。

（一〇〇一）

〇一 呉の糸を蜀の桐に張った楽器　天高い秋
〇二 空遠白く　凝る雲はくずれかけるが　流れない
〇三 湘江の女神が竹に涙注ぎ　琴ひきの素女が愁うのは
〇四 李憑が都のまんなかで　箜篌を彈奏するからだ
〇五 崑崙山の玉くだけ　鳳凰はよびかわし
〇六 芙蓉のはな露に泣き　香りたかい蘭が笑う
〇七 十二の都門のあたりでは　冷いやりした光も融け
〇八 二十三絃　天帝紫皇を動揺させる
〇九 女媧が五色の石煉って　天の穴ふさいだところ
一〇 石破れ　天驚き　秋雨がほとばしる
一一 夢に神秘の山に入り　山姥に教えたら
一二 老いぼれ魚が波に跳び　痩せた蛟が舞い出すしまつ
一三 呉剛は　桂の樹にもたれ　眠りもできず
一四 露は斜めに飛びちって　月の兎をずぶぬれにする

〇一 呉絲蜀桐張高秋
〇二 空白凝雲頽不流
〇三 江娥啼竹素女愁
〇四 李憑中國彈箜篌
〇五 崑山玉碎鳳凰叫
〇六 芙蓉露泣香蘭笑
〇七 十二門前融冷光
〇八 二十三絲動紫皇
〇九 女媧煉石補天處
一〇 石破天驚逗秋雨
一一 夢入神山教神嫗
一二 老魚跳波瘦蛟舞
一三 呉質不眠倚桂樹
一四 露脚斜飛濕寒兎

〇一〔呉糸　蜀桐　高秋に張り〕　・呉絲蜀桐　呉は江蘇、蜀は四川で、それぞれ楽器の絃（弦）材料の糸や、胴の材料の桐の名産地。材質を選んで作った箜篌、それを呉糸蜀桐といった。桐を毛氏本は「琴」とするが、誤り。賀には別に「蜀國絃」（一〇一九）がある。なお、「絃」字は「弦」の俗用だが、底本をはじめ古い板本は「絃」を使用することが多い。全唐詩は、それをすべて「弦」に直しているが、本書では底本に従い、一々に断ることはしない。　・張高秋　高秋は陰暦九月の称、そのころは杜甫が「高秋爽気澄む」（贈特進汝陽王二十韻）というように天が高くみえる。張高秋は、呉糸を蜀桐に張った季節が秋九月であった、という意味だが、張には「ひろげる」とか「さぐる」とかの意があり、ここでも呉糸蜀桐すなわち箜篌を弾奏することによって高秋の趣を拡張する、探索する、といった意味もこめられているかもしれぬ。

〇二〔空白く　凝雲は　頽れんとして流れず〕　・空白　空が遠白い、すなわち、遠方までキラキラと輝くように白く壮大なのをいう。白を、宋蜀本などが「山」とするが、誤り。　・凝雲頽不流　顔延之が「空城に寒雲凝る」（還至梁城作）というように凝固した雲。頽は、その凝固した雲に崩れるような気配が萌し、しかし王昌齢が「殺気凝って流れず」（代扶風主人答）というように、まだ流れ出さないのだ。この詩の初二句は、箜篌を弾奏しない前の、気が動こうとしてなお動かぬ状態をいっている。謝朓に「凝笳高蓋を翼く」（鼓吹曲）の用例があり、注家は「声を徐ろにし調を引く、これを凝という」という。するとここの凝雲にも、鳴り出ようとする音が静かに長く引くものであろうことが、伏線として暗示されていると考えられ、後の「十二門前融冷光」の融と照応する。頽は墜であり、凝が流へと移行する勢いをはらむ語だが、次に来る不の一字が、それをせきとめているのだ。雲を曽益は「雪」とする

が誤り。

○三〔江娥　竹に啼き　素女　愁うるは〕　・江娥啼竹　古代の帝王堯の娘で、堯の後を継いだ舜の妻となり、舜の死後、湘江に投身自殺した娥皇と、その妹の女英。後に湘江の水神となったので、湘妃とも湘夫人ともいう。張華の博物志によれば、二人が舜の死を聞いて泣き、涙が竹にしたたったので、竹はことごとく斑らになったという。これが、「竹に啼く」である。賀は「湘妃」（一〇四五）などでこの悲劇的な女性をしばしばうたう。江を文苑英華は「湘」とする。意味の上では同じ。　・素女　古代の女性の楽手。世本によれば、最古の帝王庖犧氏が五十絃の瑟を作った。のちに黄帝が素女に弾かせたところ、あまりに悲しい音なので、やめよといったが、聞かない。そこで瑟を二分して二十五絃にした、という。

○四〔李憑　中国に　箜篌を弾ずるなり〕　・中國　国の中央、すなわち都、ということで、ここでは長安をさすのであろう。「わざわざ《中国》というからには、李憑は外国人なのだろうか」という、あるひとの説を、呉正子が紹介している。朝廷も人民も総体に異民族の人や文化を歓迎することによって豊富華麗に発展した唐代のことだから、この推測は、注目に値する。賀の詩には西方の文化、ことに音楽によって触発されたと考えられるものが少なくない。李憑の弾奏も、古来の伝統楽だったら、李賀や楊巨源をさほどに感動させたかどうか。

○五〔崑山　玉砕け　鳳凰　叫び〕　・崑山　崑崙山のこと。中国の西方にあると考えられた霊山で、周の穆王が八駿を駆って天下を周遊したとき、この楽土に至り、西王母と瑶池で宴したと伝え、美玉の産地として有名である。いまの崑崙山脈はパミール高原からチベットをへて新疆にいたるものをいうが、

崑崙は混沌とかかわりがあって古代人にとっては何かわけのわからない神秘な山であり、インドのスメール、すなわち須弥山の神話が結びつき、奇異でなつかしい楽土となったものであろう。・玉碎　千字文に「玉出崑崗」というように、崑崙山は美玉の産地である。そこから出た玉の砕けるときの固く鋭く清らかな音。・鳳凰叫　鳳凰は伝説上の瑞鳥で、聖人が世に出ればこれに応じて現れるといい、梧桐に棲み、竹の実を食い、醴泉を飲み、羽毛は五色で、声は音楽の基本的な五音に相応し、飛べば群鳥がこれに従うという。鳳が雄で凰が雌である。叫とは、その雄と雌とが呼びあう愛情の声。

○六〔芙蓉　露に泣き　香蘭　笑う〕・芙蓉露泣　芙蓉は蓮の花。露泣を宋蜀本等は「泣露」とする。いずれにしても、蓮の花が露をためて泣いているようだ、というのである。・香蘭笑　香蘭を一本に「蘭香」とすると、文苑英華の注にいう。芙蓉と対する語であり、音調からいっても香蘭でなければならないだろう。五、六句は、箜篌の弾奏がはじまってその楽音がさまざまに変化するのを形容する。

○七〔十二門前　冷光　融け〕・十二門　長安の都は方形の城壁に囲まれ、一面三門で、合して十二門である。三輔黄図によれば、霸城門、清明門、宣平門、履仮門、安門、西安門、章城門、直城門、雍門、洛城門、廚城門、横門であるという。門のあるのは中心からもっとも離れたところ、寒素の人の住むところである。・融冷光　都城の中央に起こった楽音が四散して、十二門のあたりに達すると、そのほとりの冷光を融和上昇させる。融は、左伝に「その楽や融融」（隠公元年）とあって楽音の融和することをいい、詩経に「昭明融たる有り」（大雅既醉）注に「融は明の盛んなるもの」という。融の字のもつ明るいという要素は、このばあい忘れられてはならないだろう。

○八〔二十三糸　紫皇を動かす〕・二十三絲　絲を文苑英華は「絃」とし、絃でなければならぬという

説がある。字面についてはその通りだが、「絃」とすると第七句の「前」と同じ韻で、両句の脚韻も同じだから、全体の音調構成が崩れてよくないだろう。箜篌は、前記の岸辺の調査では、おおむね二十数絃で一定しないようだが、杜佑の通典には竪箜篌を説明して「体は曲がりて長く、二十三絃、竪に懐中に抱き、両手を用い斉しく奏す」といい、「二十三」を「二十二」とする本もある。李憑のは二十三絃だった。　・紫皇　沈約は「紫皇を天闕に降え、二妃を湘渚に延く」（郊居賦）といい、太平御覧の引く秘要経は「太清には九官あり、その最高のものを太皇、紫皇、玉皇と称す」といい、太清とは天のことだから、紫皇は天帝である。皇を蒙古本が「篁」とするが、誤り。

〇九〔女媧　石を煉（錬）って　天を補う処〕　・女媧　中国開闢説話中の女神である。淮南子に「女媧、五色の石を煉って以て蒼天を補う」（覧冥訓）といい、司馬貞の史記三皇本紀は次のように説明する。共工が祝融と戦って敗れ、怒って頭を不周山にぶつけた。不周山は天を支える柱であるが、このため崩れ、天地が傾いた。女媧が五色の石を煉って天を補い、鼇の足を切って地の四方を繋ぎ、芦の灰を集めて大洪水をとどめ、中国全土を救済した。　・錬石　錬を宋蜀本は「練」とし、錦囊集等は「煉」とする。意味からすれば陳弘治のいうように「煉」がよいので、これに従った。

一〇〔石破れ　天驚きて　秋雨　逗る〕　・逗　多くの注家が「とどめる」と読むが誤り。呉正子が「箜篌の声の忽ち石破れて秋雨の逗下するが如きを言う」というように、冷光をも融和する箜篌の音が上天したため、せっかく女媧が補修した所が、ふたたび融けて破れ、天は驚いて秋雨をほとばしらせた。

一一〔夢に　神山に入って　神媼に教うれば〕　・夢入神山　神を全唐詩は「坤」とするが、誤り。　・教神媼　神媼は神仙の老婆で、日本の山姥に当るだろう。干宝の搜神記に、四世紀の初めころ、樊道基

と名のる神が現れ、神の老婆は成夫人と呼ばれ、音楽が好きで、箜篌の弾奏に巧みであり、人の演奏を聞くと、起って舞った。神嫗はその成夫人であり、李憑が箜篌の技術に優れるのは、夢に神山に入り成夫人の教授をうけたからであろうと、呉正子がいう。それにしても、この句はわかりにくいが、弾奏音がいつのまにか夢になり、もしくは、夢のようにさだかでない幻奇なものとなり、神秘な山に入り、箜篌に巧みな神女をも教導した、というふうにもとれる。賀には、芸術家の努力は天帝以上のことをなしとげるいう、中国では破天荒な芸術論を持っていたので、それからすれば李憑が神嫗から教わったと解釈するより、李憑の芸術が神嫗を教える、とするほうがよいだろう。拙稿「筆補造化天無功」（李賀論考）参照。

三〔老魚　波に跳び　瘦蛟（そうこう）　舞い〕　・老魚跳波　俗諺に老魚不上鉤とあり、年経た魚はなかなか針にかからない、という。まして跳んだりはせぬものである。けれども列子に「瓠巴（こは）琴を鼓して鳥舞い魚躍る」というように、優れた音楽家の弾奏には魚も躍る、まして李憑の楽の音には、痩せこけた蛟も浮かれて舞い出す、というのであろう。

一三〔呉質（ごしつ）　眠らず　桂樹（けいじゅ）に倚（よ）り〕　・呉質　歴史上の人物としては魏の文帝の友人であった呉質（？―二三〇）が有名だが、ここには関わりがない。呉質は、董懋策のいうように「呉剛」と見るべきだろう。呉剛は呉質よりさらに遡る漢代のひとで、段成式の酉陽雑俎にいうように、仙人になる術を学び、過失があって、迫われて月中の桂樹を伐らされた。桂は高さ五百丈、これを伐ると、樹に傷はついたが、つくに従って合した（巻一）。それならここに引いて桂との縁もつながる。李憑の妙音に聞きほれて桂樹を伐ることも忘れ、眠ることも忘れて、桂樹にもたれたまま茫然としている、というほどの意となろう。

「呉質」を「呉剛」とする本がないので、賀の思い違いだろうとか、いや呉質でいいのだとかいった議論が盛んだ。賀は「呉剛」としたかったけれども、賀の祖父か曽祖父の諱（忌み名）が「剛」だからそれを避けて、意味の上で通じる「質」字で代用したのだと考えられる。賀の作品のすべてに「剛」の字が一度も使用されないのが、これを裏書きする。そこで訳文には「呉剛」を採用した。ただ、わたしの推測のように、諱だとすると、李賀が作品集中にその字をいれることは当時の習慣として出来なかったのだから、テキストとしてはやはり「質」のままにしておかざるをえないことになる。

一四〔露脚（ろきゃく）　斜に飛び　寒兎（かんと）を湿（ぬ）らす〕　・露脚　脚は、細かなものがびっしりと集まった痕跡をさすことば。　・寒兎　兎は月の中に住むといわれるそれ。

・この詩は、韻の踏み方からいって、四段に分かれる。第一段の韻字は、秋、流、愁、篌で、平声の完全脚韻。第二段は叫、笑で、去声の完全脚韻。第三段は光、皇で、平声の完全脚韻。第四段は處、雨、嫗、舞、樹、兎だが、この六字のうち雨と舞の二字は上声で、他の四字は去声だから、完全な脚韻とはいえない。しかし複雑な踏み方がしてあるのは、この詩の複雑な構成を韻法によって示してあるのだ。この詩の中には二種類の時間が流れている。ひとつは地の時間であり、ナレーションの時間といってもよく、日常茶飯の意識を芸術空間に導入する時間。もうひとつは音楽の時間であって、音楽の展開がそのまま時間となったものである。この詩では第一段と第三段が地の時間であり、第二段と第四段が音楽の時間である。第一段の地の時間は第三段の地の時間に接続するが、その間に第二段の音楽の時間が挿入されたことで地の時間にある変化が生じる。第二段の音楽の時間は第四段の音楽の時間に接続するが、その間に第三段の地の時間が侵入するために、音楽の時間にも変化が生じる。その変化は、おおざっぱ

に《昼》と《昼から夜へ》という二つの形に分けることができようが、その二つも、地の時間の昼と音楽の時間の昼とでは異質のものであり、それぞれの昼から夜へも異質である。しかしそれが第四段では異質のものが混合して一つのものになっている。この一首は、以上のような異種の時間を組み合わせた複雑な構成をとっていて、そのことが四種の韻字で脚韻を踏むという複雑な韻法で暗示してある。組み立ては複雑だが、地の時間も昼から夜に向かい、音楽の時間も昼から夜に向かっているために、全体が昼から夜への一つの推移と感ぜられ、地の時間と音楽の時間が別々のものではなく一つの時間として、しかし単純な一つの時間とうけとめるには異常に膨らんだ時間として、読者に印象づけられるのだ。白居易の「琵琶行」は、音楽の演奏を詠じた大作で、賀の作よりはるかに有名で、楽音描写は巧みであり韻法も凝ったものだが、白氏をポール・モーリヤとすると、賀はベラ・バルトークに当てていいくらい違っている。

【李賀文献目録抄】　たまたま手もとに集まった研究者の注釈・著書・論文は次の通り。新しいものが古いものより進んでいるとは限らず、ここに挙げたものが優れ漏れたものが劣る、というわけでもないはずである。その他の中国大陸のものは『中国古典文学研究論文索引』を、台湾や香港ないし欧米のものは杜国清教授の紹介論文や著書を見ればよい。大学や研究機関と関わりをもたないと情報に疎くなる。名は聞こえなくとも志篤くすぐれた研究を重ねておられる方々のおいでになることを信じるが、わたしの手で紹介できないのが残念である。

泉鏡花　「春昼」一九〇六年新小説十一月号。この小説に「宮娃歌」2096引用。

田北湖　「昌谷別伝」一九〇九年国粋学報四巻六期。

夏耿眠　「李長吉新意」一九二八年汎天苑創刊号など。夏耿眠は日夏耿之介の別号。

王礼錫　『李長吉評伝』一九三〇年神州国光社。

漆山又四郎　『訳注李長吉詩集』一九三三年東明書院。

朱自清　「李賀年譜」一九三五年清華学報一〇巻四期。

佐藤春夫　「漢詩漫読妄解」一九三六年改造二月号など。

周閬風　『詩人李賀』一九三六年商務印書館。

稲田尹　「李長吉の生涯」一九四〇年臺大文学五巻二号。

原田憲雄　「李長吉」一九四一年龍谷大学卒業論文。『方向』一九五三年以降方向社。『幽歓集』一九五六年方向社。『蓼莪集』一九六四年方向社。『李賀研究』一九七一―八三年方向社。『李賀論考』一九八〇年朋友書店など。「李長吉を論ず」一九四二―三年支那学一〇巻特別号。

銭鍾書　『談藝録』一九四八年開明書店など。

石川一成　「李長吉の色彩感覚」一九五五年中国文化研究会会報四巻二期。

荒井健　「李賀の詩」一九五五年中国文学報三。『杜牧』一九七四年中国詩文選一八。『秋風鬼雨』一九八二年筑摩書房など。

和田利男　「李賀の鬼詩とその形成」一九五六年群馬大学紀要人文科学編五など。

工藤直太郎　「李賀とKeats」一九五六年英語青年一〇二巻三号など。

上尾龍介　「苦吟と象徴」一九五六年九州中国学会報二。「李賀と孟郊」一九五七年同会報三。「夜の詩人」一九五七年中国文芸座談会ノート一〇号。「岑参の辺塞詩」一九六四年目加田誠博士還暦記念中国学論集。「原田憲雄氏の李賀論文」一九七二年中国文学論集三。

葉葱奇　『李賀詩集』一九五九年北京人民文学出版社。

横山伊勢雄　「李賀小論」一九六〇年中国文学研究二号。

小林太市郎　「小林太市郎博士書簡」一九六四年方向一〇号。一九五四―六〇年間に原田憲雄と原田禹雄に宛てた四八通の書簡で、なかにしばしば李賀に触れた卓抜な見解がちりばめられる。

SOUTH　「Li Ho—a Scholar-Official of the Yuan-ho Period」 JOSA Ⅱ-2 1964

草森紳一　「垂翅の客（李長吉伝）」一九六五―七五年現代詩手帖、未完。「江戸時代李賀関係資料集編」藝文研究二七号。「室町時代の李賀」

一九六七年無限春季号など。

GRAHAM　『Poems of the Late Tang』 Baltimore : Penguin books 1965

陳穎　『Li Ho and Keats』 一九六五年清華学報新五号一期。

葉慶柄　「両唐書李賀伝考弁」一九六八年淡江学報七期など。

艾文博　『李賀詩引得』一九六九年台北成文出版社。

陳弘治　『李長吉詩校釈』一九六九年台湾嘉新水泥公司文化基金会刊。

FRODSHAM　『The Poems of Li Ho』 Oxford : Clarendon Press 1970

周誠真　『李賀論』一九七一年香港文芸書屋。

川合康三　「李賀とその詩」一九七二年中国文学報二三。

比留間一成　『李賀詩集』一九七二年角川書店。

森瀬寿三　「李賀『秦王飲酒』をめぐって」一九七四年入矢教授小川教授退休記念中国文語学論集など。

芦立一郎　「李賀小考」一九七五年集刊東洋学三四号。

杜国清　「李賀研究的国際概況」一九七七年台北現代文学復刊号二期。『Li Ho』 Boston: Twayne Publishers 1979 など。ともに世界の、ことに欧米の研究状況について詳しい。

林同済　「李賀詩歌集需要校勘」一九七八年光明日報一二月一二日など。

銭仲聯　「読昌谷詩札記」中華文史論叢一九七九年三輯。

中国社会科学院文学研究所図書資料室『中国古典文学研究論文索引』1979・1982・1985・1988年。中国大陸の一九四九～一九八三年間に印刷された研究は、この四冊にほぼ網羅されているようだ。

山崎みどり　「李賀の楽府詩」一九八二年中国詩文研究会。

岡田充博　「李賀の『箜篌引』について」一九八三年名古屋大学研究論集八五など。

陳治国　『李賀研究資料』一九八三年北京師範大学出版社。

斎藤功　「李賀の『追和』詩」一九八四年学林三号。

劉衍　『李賀詩伝』一九八四年山西人民出版社。

呉企明　『李賀詩校箋証異』一九九〇年湖南出版社。

『李賀』『唐音質疑録』ともに一九八五年上海古籍出版社など。

野原康宏　「李賀の時間表現について」未名七号。

楊文雄　『李賀詩研究』一九九〇年台北文史哲出版社。

大平桂一　「李賀の選択」一九九〇年颱風二三号。

徐伝武　『李賀詩集訳注』一九九二年山東教育出版社。

夕　陽

1994 10 29　　原　田　　慶

雲が動いて
夕陽がまぶしい
ちかごろは近所が静かだ
わたしの知っていたこどもたちは
どこへ行ったのだろう
きのう町で
郵便配達の若者に出あった
大きな黒皮のカバンをハンドルに掛けて
ちょっとはずかしげにわたしから
目をそらし赤い
自転車を走らせていった

今年の夏はいつにない酷暑だったから

キンモクセイが濃い香をただよわせながら
同じ秋に二度の花を咲かせた

少年野球のユニホームを着たこどもが
夕陽に向かって歩いてくる
せまい通りのずっとおくにひかえる大文字山
送り火の記憶がいつも
わたしたちに祈りのこころを呼びさます

こどもはまっすぐ家に帰り
ユニホームは急いで洗濯されるだろう
わたしは立ちどまって
夕陽と大文字のハーモニーを聞く

石のラクダ

1994 12 13　　原田　慶

公園で
落葉に埋もれる
石のラクダを見た
娘の幼い頃
このような動物たちが
街のあちこちの公園で誕生した
こどもたちは
背によじ登り頬をすりよせて
彼らに話した
言葉にならないたくさんのことを

城の傍の公園に来るこどもは
たがいに見知らぬ顔だったから
遊びながらみんな
なんだか寂しいようすをしていた
ぶつかったりいっしょにころんだりすると
黙って逃げてしまうのだった
石のラクダはすこし傾いて
もう二十年のあいだ
座りつづけている
触れあうこともなくなったこどもたち
その目にうなづいて
なぐさめてやることもできなくなった遠い日の
こどもたちのことを想いながら

白峯神宮

1994 12 27　原田　慶

二十三日は今年最後の謡曲の稽古日だった。会場のある白峯神宮に着くと、拝殿横の白砂で、蹴鞠の練習をしている人達があった。鞠水干（まりすいかん）に葛袴（かっこ）という装束をつけている。「やあ！」というかけ声とともに、ポーンとよい音をたてて鞠が飛ぶ。

「こんにちは、遅くなりましてすみません」　わたしは部屋に上ると急いで座に着いた。

「常盤の味噌松風はほんまにおいしおっせ、いきなり行ったかてなかなか売ってくれしまへん、注文のぶんだけしかこしらえてへんのです。あれは小麦粉に砂糖と味噌を入れて焼くんですけど、西京味噌をつこてるんです。評判を聞いて来たんやさかい、どうしてもほしいと言うてねばっとおみやす、しょうことなしに売ってくれることもありますわ」

先生の世間談義の最中らしい。わたしの傍の人が、「今日もお菓子の話ですねん」と小声で教えてくれて「ホホホホホ」と笑っている。この前もお菓子の話だった。

「望月は、知らん人に上げるもんやおへんな、ふつうの今川焼やと思われてしまいますわ。あれは溶いた小麦粉を、はじめ、すうと紐みたいに鉄板に落として焼くんです、それをくるっと輪にして底をつけて、その中へ餡を入れてから上に小麦粉を塗って、裏返して焼くんです。今みたいな型がない時代からずっと、今でもおんなじようにして焼いてますな。あれは一つ食べたらもう後とっても食べられしまへん、餡がたっぷり入ってますさかい。木屋町の望月の並びに月餅という菓子をこしらえてる店がありますやろ。あれは謡曲の『月』にひっかけてつけた名前です。昔は素謡の会に茶菓子を出したんです。

蒸し菓子やったんですけど、食べんと持って帰る人があります、袂に入れて持って帰るもんやさかい、くずれますんや、そこでなんとかならんかと考えたんが、この焼き菓子やったんです」　先生は時々自分がしたような話しかたをされるので、つい引き込まれて聞いてしまう。

「白峯さんもサッカーブームでお参りが多なりましたな。高校生の修学旅行は、団体で来てまっせ。その生徒に、なんぞないかて尋ねられるもんやさかい、この頃は社務所で、お守りやら蹴鞠の絵馬やらちょっとしたもんをこしらえて並べてます。ここはもと、飛鳥井家の屋敷があったところです。藤原氏の支流で蹴鞠と歌の家元でしたんや。境内に「まり精大明神」のお社がありますやろ。まりの神さんやさかい、サッカーだけやおへん、野球でも何でもまりに関係ある人がみんな参ってくるんです。明治の初めにできた神社ですけど、明治天皇が、四国で亡くなった崇徳天皇を祀ったげなあかん言わはって、その時に飛鳥井家がここを寄進したんです。ほら、かけ声が聞こえますやろ」

わたし達は、外の蹴鞠の音が賑やかになったので、障子を開けてしばらく見学した。それから先生が「さあどうぞ」と合図されると、いつものように出席順に先生の前に出るのである。

やっとお稽古がすんで外へ出たとき、別の部屋で蹴鞠の人達が、障子を開けたまま着がえをしていた。

「けっこうな蹴鞠を見せていただきまして有り難うございました」

みんなで挨拶をすると、

「よい声を聞かしてもろてましたで」

とむこうも返事をされた。

わたし達は笑って「どうぞ皆さんよいお年を」と言いあって、白峯さんの通用門を出た。